



マウントクック

7月号④

平成 24 年 7 月 21 日

カンタベリー日本語補習校
校長 長野 晴展

ふ・る・さ・と

育ったところ 必ずしも家庭ではない
心を育てられたところが 家庭である
学んだところ 必ずしも母校ではない
よき師よき友にめぐり会えたところが 学校である
生まれたところ 必ずしも故郷ではない
心をとどめたところが 故郷である



小 6 年 (6/30)
授業に集中しています。

この文は、どんなに豪華な家に住んでも、どんなに立派な校舎で学んでも、人間が最後に行く着くところは、真に心を育ててくれたところであると教えています。この補習校が子どもの心をとどめる母校となるよう保護者・運営理事・日本人会の皆様と連携し、子どもの鏡としての大人の姿の大切さを自覚し、さらに努力し合っていきたいものです。

さて、今日から二学期が始まりました。校内読書感想文展、クラス写真、授業研究(教職員)、中間テスト、終業式(あゆみ配布)などの行事が予定されています。戸外で遊びにくい冬の寒さが厳しい時期ですが、学習・読書にはかえて適している季節ではないでしょうか？

互いに協力し合いながら、子ども達の国語力を伸ばしていきましょう。



中 1 年 (6/30)
板書を写しています。



中 2 年 (6/30)
うなずいています。



中 3 年 (6/30)
しっかり聞いています。

[平成 24 年度 2 学期の予定：10 授業日]

期 日	補 習 校 行 事	
7 月 2 1 日	始業式 ～読書感想文指導期間～	幼)入園申込締切 7/31
2 8 日		
8 月 4 日		幼)うんどう会
1 1 日	クラス写真撮影	幼)クラス写真
1 8 日	事前授業研究(4-1) クラス写真予備	
2 5 日	授業研究会(4-2)	
9 月 1 日		幼)敬老の日・座談会
8 日	中間テスト 読書感想文提出締め切り	幼)ひらがな大会
1 5 日		
2 2 日	終業式・学習のあゆみ 読書感想文表彰 HP 掲載	幼)お月見



▲七夕集会 (6/30)
優秀賞 2 年 2 組 (中休み)

▼ (6/30) 行儀よく座っていただいています。(中休み)



○裏面に「読み聞かせ」を薦める児童文学者の文章(抜粋一二)を載せています。参考にしていただければ幸いです。

読み聞かせは心の栄養（抜粋―二）

児童文学者 宮地 敏子（四年半アメリカで子育て）

母語教育と乳・幼児期の読み聞かせ

母語の基礎的な構造の枠組みは幼児期に形成されます。子どもが五、六歳にもなれば、おとなたちは幼児語を使わず、対等に話をするようになります。それは、母語の教育は乳幼児期が一つの山であることを示しているといえるでしょう。海外では周りの教育環境にも欠けていまずから、親たちは母語の発達に、より留意する必要があります。子どもは母語をどうするかは、親の価値観と環境づくりにかかっているのです。

母語が自己肯定感ひいては自国文化への敬愛をうみ、理想的に言えば、他者や多文化への尊重にも関わっているとすれば、絵本の読み聞かせは、それとどういう関係があるのでしょうか。

読み聞かせはもちろんオールマイティーではありませんが、このかけがえのない乳・幼児期に感性や思考力、知識量などいろいろな面が育つ一助となります。また、「育児は育自」といいます。私もその一人ですが、母親たちとブックトークを長年続けてきて、読み聞かせで育つのは子どもだけではないと痛感しています。子どもの発言や態度に敏感になったように思います。何か事件があるたびに子どもは事前にサインを出していたはずだと報道されますが、そのサインに敏感になれるようです。

子どもに絵本を読むとき、親は、まず作者の言いたいことを理解しようとする。子どもの反応をよく聞いている。そして会話を楽しんでいる。こうしたことが知らず知らずに、一個の人格を持つ子どもへのアンテナを磨いていくのかもしれない。

しかも、幼い子どもにとっても、また親にとっても、読み聞かせは「喜び」のなかで自然に母語が育つという魔法が働くのです。

読み聞かせで育つもの

読み聞かせの効果は次の三点にあると考えます。

一つには、精神面で、子どもに安心感を与え、おとなへの信頼感を培うこと。海外での生活は意識するしない

に関わらずストレスを伴います。「人生で初めての経験」を絵本化したものは、主人公と自分を重ね、勇気を出して新しい環境に飛び込むことを励まされることでしょう。なによりその本を読んでもくれるのは自分の緊張を分かってくれるお母さんやお父さんなのです。一日のうち親に絵本を読んでもらう温かで静かな時間は緊張感を解く癒しのひとときです。

この楽しさや温もりが子どもたちにとって明日への活力になります。旺盛な好奇心や探究心は、港がしっかりとしていればこそ船出できるのです。不安な気持ちに支配されている子どもは「学ぶこと」ができません。自分で読めるようになって、親が読んでくれる楽しさ嬉しさは別ものなのです。自然に卒業していくまで、読み聞かせを親子で続けたいと思いますように。

二つには、言語面の効果をあげましょう。語彙が増えます。ある保育園で『どうぶつのおやこ』の絵本を読み聞かせると、「いぬ、ねこ、ぞう」ほんの僅かだった0歳時の発語が、ひと月後には「うさぎ、くま、さる、かば、きりん」と飛躍的に増えたという報告もあります。

増えるのは語彙ばかりではありません。知識が増えます。バランスの取れた適切な選書によって、子どもたちの知識は文学から芸術、自然科学、歴史などあらゆる人類の英知へと広がっていきます。

温もりのある肉声で、特に乳・幼児期にたくさん日本語を聞くことは、海外での母語習得には欠かせない教育方法の一つでしょう。

三つには、想像力が育つことです。豊かなコミュニケーションは双方のイマジネーションが響きあうことで生まれます。言葉の働きの中には自分の内面を育てたり、感情を抑制したりすることもあります。本の中に描かれる人間の様々な言動は、読者の子どもの内面を鍛え感性を磨くのを促します。本の好きな子どもは想像力が育ちますから、言葉を一義的に捉えることはありません。思いやりも根っこは想像力にあるのです。